

〔共同研究：現代世界の政治・経済における理論と現状分析の基礎研究〕

〔資料〕

カルロス・ネルソン・コーティニョ：

## グラムシの諸範疇とブラジルの現実\*

解 説 (勝 部 元)

さいきん、「グラムシの獄中ノート」Iで、イタリアのリソルジメントについてのかれの解説を読んでいて愕然とした。明治維新や戦前の日本資本主義にかんする有名な論争の中で、ロシアのツァーリズムやプロイセンの事例については、しばしば対比がなされ、考察されたが、どうしてイタリアの「リソルジメント」の事例が、無視されてきたのであろう。エンゲルスがすでにイタリアについてすすんだものとおくれたものの混合、イタリアの労働者が、すすんだ資本主義体制だけでなく、おくれた封建遺制によって苦しめられている、ことをつぎのように指摘していた。「民族独立運動の期間中およびその期間後に政権についていたブルジョア階級は、その勝利を完全なものとするのができなかったし、またそうしようとしなかった。彼らは、封建制の残滓をほろぼししなければ、国民的生産を近代資本主義型に改変もしなかった。彼らは、資本主義体制の相対的・一時的長所をその国のために確保することができないで、その反対に、この体制のあらゆる弊害、あらゆる短所の重荷をその国におわせた。そればかりではない。陋劣きわまる銀行不正事件に関係することによって、尊敬と信頼の最後のなごりまでもうしなってしまった。」

「勤労人民—農民・手工業者・農業労働者および工業労働者—は、そのために苦しい状態にある。それは、一部は封建時代ばかりかもっと

古い時代からうけつがれてきた束縛の結果であり（折半小作制<sup>メツツアドツフ</sup>、家畜が人間を駆逐している南部の巨大領地制<sup>ラティフンディア</sup>を参考せよ）、一部はブルジョア政治が発明した貪欲あくなき国家財政制度の結果である。ここでもマルクスとともにこういうことができる。『ほかの西ヨーロッパ大陸にとってと同じく、資本主義的生産の発展ばかりでなく、その発展の欠如もまたわれわれを苦しめている。近代的な窮状とあいならんで、なおほかに時勢にあわぬ社会的および政治的諸関係という付属物をともなう古風で時代おくれな生産様式の存続から生じる一連の伝来的な窮状がわれわれを圧迫している。われわれは、生きているものになやんでいるばかりでなく、死んだものにもなやんでいる。』」（1894年「トウラティあての手紙」選集第17巻498—99ページ）。どうしてこの方面の研究がこれまでなおざりにされてきたのであろう。もちろん単純な対比や同一視は問題にならないとしても、日・伊の比較政治史的考察は十分意味があるし、そういう努力が、もう一ぺん、日本近代史を見直すために必要ではなからうか。ところが同様な問題意識をもった学者・研究者たちが、ごくさいきん、日・伊の共同研究を開始したことを加藤周一氏の小論によって知ることができた。

加藤周一氏によると（「夕陽妄語・近代史研究の新視点、日伊比較事始」朝日新聞夕刊85年10月22日）1985年9月末に、イタリアの歴史家と日本の若い研究者による日・伊近代史の比較研究のための第1回会議がローマで開かれた由である（「イタリア自由主義国家と明治時代」イ

\* Carlos Nelson Coutinho; Le Categorie di Gramsci e la realtà brasiliana, (Critica Marxista, 1985, anno 23, No. 5)

タリア・リソルジメント史研究所ローマ委員会主催 柴野均「日・伊歴史会議によせて」イタリア学会誌35号参照)

加藤氏という「イタリアも日本も、およそ同じ時期（リソルジメント＝統一1860，明治維新1868）に近代国家としての統一を実現し，工業化へ向かって第一歩を踏みだし，その後半世紀足らずの間に，強力な工業国としての基礎を作った。後発資本主義の成功という点では，よく似ている。統一以前の条件にも似た面があって，たとえば同一民族・同一言語（方言の多様性にもかかわらず），比較的高い人口密度などである。」イタリア語とイタリア史については素人のわたくしにとってこれは大変喜ばしいことであるし，成果を刮目して期待している。

ところがごくさいきんわたくしの尊敬する大先輩で，われわれのプロジェクトでもかつて貴重なヒアリングをさせていただいた石堂清倫氏からブラジルについて，グラムシの「受動的革命」の概念や「拡大された国家」の概念をつかって分析し，ブラジルは今や西欧型の社会であり，「陣地戦」と「社会主義のための民主主義的」戦略をとるべきである，と論証した面白い論文があると教えていただいた。わたくしはブラジルについてはまったく無知でこの国はまだおくれた発展途上国で，勤労人民の主要な闘争形態としてゲリラ闘争が行なわれている位の認識しかなかったのでまったく驚愕してしまった。そこで今後の日本近代史の研究にとって（またわれわれのプロジェクトの向上にとって）十分参考になり，はかり知れない寄与が与えられると思って，石堂氏にたのんでこの論文の翻訳の掲載の許可を受けた。以下に掲げるのがその論文である。かつてわたくしはロシアの軍事的封建的帝国主義の研究について，わが国にはまだまだまったく知られていなかったソ連のシドロフの研究を岩村登志夫氏にたのんで「国際関係研究」誌上に掲載したことがある（「国際関係研究」第5号，63年9月号，シドロフ「レーニンのロシア軍事的封建的帝国主義論」）。このシドロフの論文の場合と同じように今度もまたこの論文の掲載は多くの貴重な刺戟をわれわれに与えるも

のと信じて疑わない。

この論文を理解するためにブラジル現代史についてごくかんたんなスケッチしておこう。（「共同通信社の「世界年鑑」85年版，「各国別世界の現勢」II，岩波講座「現代」別巻2，「最新世界現勢」平凡社 後藤政子「現代のラテン・アメリカ」時事通信社を参照）

世界年鑑（共同通信社）1985年版によるとブラジルの総面積は851万1965平方軒。世界第5位で，わが国の22倍の広さをもち，南北6千軒，東西4千軒の大国である。総人口は1億2966万人で，住民構成はポルトガル系及び混血がもっとも多い。その他にポルトガル人，イタリア人，スペイン人，日本人，白系ロシア人，ドイツ人等の移住者が数百万人いる。原住民のインディオは，かつて数百万人いたが白人の圧迫のため，現在は10—20万に減少している。公用語は南米唯一のポルトガル語，国教はローマ・カトリックである。

つぎにこの国の政治史をごくかんたんに述べる。

16世紀のはじめにポルトガルの植民地となったが，1822年，独立してブラジル帝国として絶対王政をとった。従来のサトウキビ栽培（大土地所有と黒人奴隷の輸入）に加えてコーヒー栽培が始まり，イギリス資本が浸透してきた。1888年には奴隷制が廃止された。翌89年11月5日，これに不満をもった大地主，軍人らの共和派による無血革命によって帝政は打倒され，共和制となった。そして1891年の新憲法で20州からなる連邦共和国となった。これは軍部に支持されたコーヒー農場主を主とする地主の権力であった。第一次大戦後，工・鉱業の発展にとともに，新しいブルジョアジーとプロレタリアートが成長してきた。イギリス資本に対するアメリカ資本，ドイツ資本の競争も激しくなった。またサンパウロ州の大地主・ブルジョアジーに対する他州の地主ブルジョアジーとの対立も激しくなった。これらの対立を反映して1922年，24年には失敗に終わった軍部のクーデターが企てられた。（22年—コパカバーナ要塞での反乱，24年—サン・パウロでのイジドロ革命）この国

における29年—32年の世界大恐慌の打撃は、甚だしく主要輸出品であるコーヒー価格下落、輸出不振のもとで経済危機が深まり、政治も大混乱期にはいった。30年の大統領選挙では従来の支配層の代表であったサンパウロ州その他の州のコーヒー栽培大地主と商業資本家のブロックの推す候補がミナスジェライス州その他の州のブルジョア・地主候補ジェトウリオ・バルガス（もとリオ・グランデ・ド・スル州知事）を打ち破った。しかし同年10月バルガスは将校団と結んでクーデターをおこして権力を握り以後15年間この独裁政権は続く。第二次世界大戦にさいして、ブラジルは連合国側について参戦し、44年イタリアに出兵した。戦後国際的 antifascism 戦線の勝利の下で、国内の民主主義運動も高まりその圧力の下にバルガスも、普通選挙法や政党活動の自由を認めざるを得なくなった。永年非合法だった共産党も合法化され、45年5月投獄されていたブラジル共産党の書記長で伝説的な「希望の騎士」カルロス・プレステスも釈放された。しかし45年10月の大統領選挙をまえに、反動勢力は民主革新勢力の躍進を恐れ、アメリカの援助の下で陸軍にクーデターを起こさせた。そしてその圧力でバルガスは辞任する。結局陸相のドウトウラ将軍が大統領になり、アメリカ資本と結んだサンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ、ミナス・ジェライス各州出身のブルジョアジーを中心とする政府が樹立された。しかしこの政府の対米従属外交、経済状態の悪化、反民主政策に人民の不満は高まり、50年末の選挙では労働党や社民党の推すバルガスが勝利し、大統領に返りさいた。

しかしバルガスが行った民主的、民族的諸政策に不満をもつアメリカ及び軍部（空軍）の圧力により54年10月バルガスは自殺におこまれ

てしまった。そして55年10月の大統領選挙では、社会民主党のジュセーノ・クビチュクが反動勢力を打ち破って当選し、大規模な外資導入の下で工業化、国土開発計画を実施した。しかしそれと同時にインフレが高まった。

60年1月には農地改革、対ソ復交、キューバ支持をかかげるジャニノ・クアドロスが大統領選挙で当選した。しかし61年8月、軍部の一部をふくむ反動勢力の圧力によってクアドロスは大統領を辞任させられ、副大統領のグラールが政権をついた。グラール大統領は民族的独立と自主外交土地改革令、精油所国有化など民主的、民族的な政策をとった。これに反発して64年3月31日軍のクーデターが勃発した。その後ウンベルト・カステロ・ブランコ将軍の独裁政権（1964—67年）、コスタ・エ・シルヴァ（68—69年）政権と軍人独裁政権が続いた。この状況の下で、都市ゲリラ闘争が勃発する。二代目の軍人大統領エミリオ・メディシ（69—74年）は強硬手段によって都市ゲリラを鎮圧し、外資導入・地域開発、輸出拡大政策を行なった。74年3月、四代目の軍人大統領エルネスト・ガイゼルは漸進的民政移管の方針を明らかにしたが、73年末の石油危機によって国内経済は大打撃をうけていた。79年3月、ガイゼルと同じ軍部内知識人グループに属するジョアン・フィゲレドが五代目軍人大統領に就任し、民主化措置を推進し任期終了時に民政移管をすることを公約した。85年3月にはサルネイ大統領の下でついに民政復帰が実現した。

しかしインフレの激化、通貨切下げと経済の困難が続き84年9月末現在で累積債務は986億ドルに達し、開発途上国中最大の債務国となっている。

## 翻 訳 (石堂 清倫)

### 1. 序 言

1966年と1968年のあいだに、すなわち1964年に発足したブラジルの独裁体制の内的諸矛盾が、

文化の分野でまだある程度自由の余地を認めていた時期に、出版界で大胆な企画が見られた。それまでポルトガル語では未発表のアントニオ・グラムシの重要著作のうち五点がわずか3年